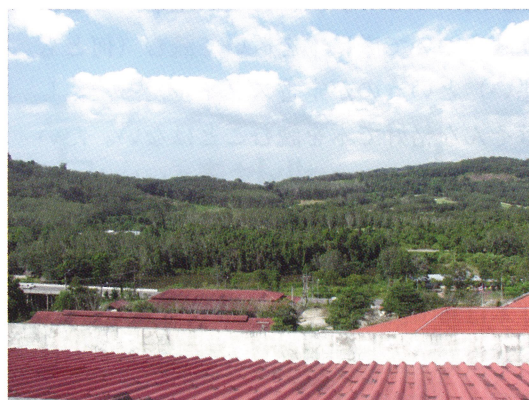
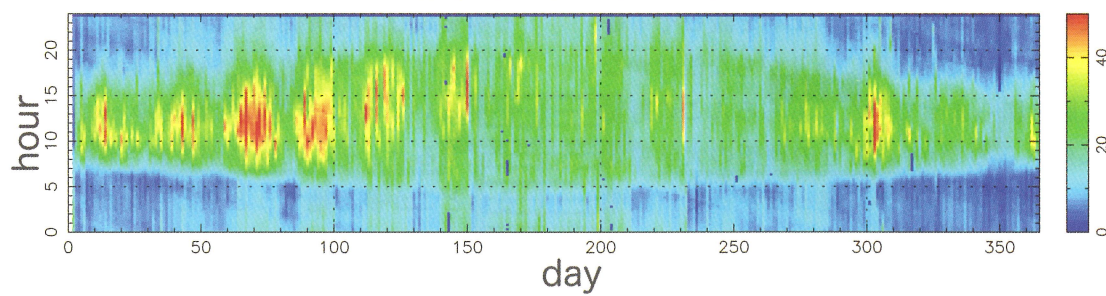




TEC over TOKYO



「本は寝て読むもの」

小 島 佐恵子

読書の姿勢について研究している人がいると聞いたことがある。本を読む姿勢は人それぞれさまざまだとは思いますが、これを読んでいる方は今どのような格好でこれを読んでいるだろうか（もちろんこれは読書とまでいかないかもしれないが）。あるいは、普段どのような姿勢で読書をしているだろうか。幼いころの私は、必ず部屋の隅で窓に向かい立膝をついて床に本を置いて読む（何とも行儀が悪い）というのが定番スタイルだった。しかし今はそんな格好で本を読むことはない。たいていは電車やバスの中で座って、あるいは立って読むか、椅子に座って机に向かって読んでいる。

加藤周一は、『読書術』（岩波現代文庫、2000年）の中で「本は寝て読むもの」と述べ、「端座書見」は不便・不自然であると指摘している。たしかに「端座書見」は苦しいかもしれないが、「本は寝て読むもの」……。ふと大学時代を思い出した。念願の文学部に入学し、「好きな本を読むぞ！書くぞ！」とおバカ文学部生にありがちな浅はかな野望？に胸を膨らませていた（もちろんこの野望はすぐに破れるのだが）。自分の理想の大学生像としては、「大学のベンチに寝っ転がって（授業もろくに出ずに）小難しい本をたくさん読むこと」であった。実際それを試みようとして、天気の良い午後に図書館で借りてきた本を持ってキャンパスをうろうろしてみたが、周囲のベンチに寝っ転がっているのは、気だるそうに煙草の煙を燻らせている男子学生であったり、どこの洞窟から出てきたのかと見間違えような風貌の男子学生（学生？）であったり、はたまた仲の良さそうなカップルであったりと、私なぞが隣に座ることは到底憚られるような人々ばかりに占拠されていた。早い段階で学内のお気に入りの野外読書スポットを見つけておきたかったのだが、それは結局叶わなかった。そして毎回すごすごと図書館に戻っていたことを思い出す。もっとも小難しい本を図書館で読

んでも、すぐに心地よい睡眠の世界へと誘われるのがせいぜいであった。いわゆる以前なら「教養書」と呼ばれていた類のこれらの本は、軟弱文学部生の私には小難しいどころか、とても難しく、理解しながら読み進めることなどもってのほかだった。寝っ転がって読んでいたら、数分後には数冊積み上げて枕にしていたに違いない。本当にただの憧れなのであった（余談ではあるが、この図書館で現・宮崎県知事をよく見かけた。彼は難しい顔をしながらもよく勉強していたような記憶がある。）

4年間の間、残念ながらベンチに寝っ転がることも、小難しい本を読破することも結局できなかった。しかし、「寝っ転がって読む心地よさ」だけは覚えた。そしてその対象はもっぱら自分の好きな小説だけに限られた。とくに夏は最高である。暑い日差しに照らされた窓際で、寝っ転がって本を読む。時折疲れて目を閉じる。瞼の赤味が日に透けて、目を閉じているにもかかわらず視界が明るい。そこで本の内容をゆっくりと思い出す。すると、そこに物語が投影され、展開し始める。どこか夢心地でうとうとしながら、現実逃避の無銭旅行を繰り返していた。

ここまで思い出して、いつのまにかそれを止めていたことに気がついた。大学時代の日々はそれなりに楽しく、輝いていたような気がするが、やはり未完成で、その未完成な部分にどこか曇った、苦しい気持ちを抱えていた気がする。思い返してみると、そうした自分を無条件に解放できていたのは、まさに寝っ転がって本を読んでいたときだったのではないかと思う。いつのまにかあのときのような感情はなくなってしまったが、それは少しは大人になったからなのだろうか。

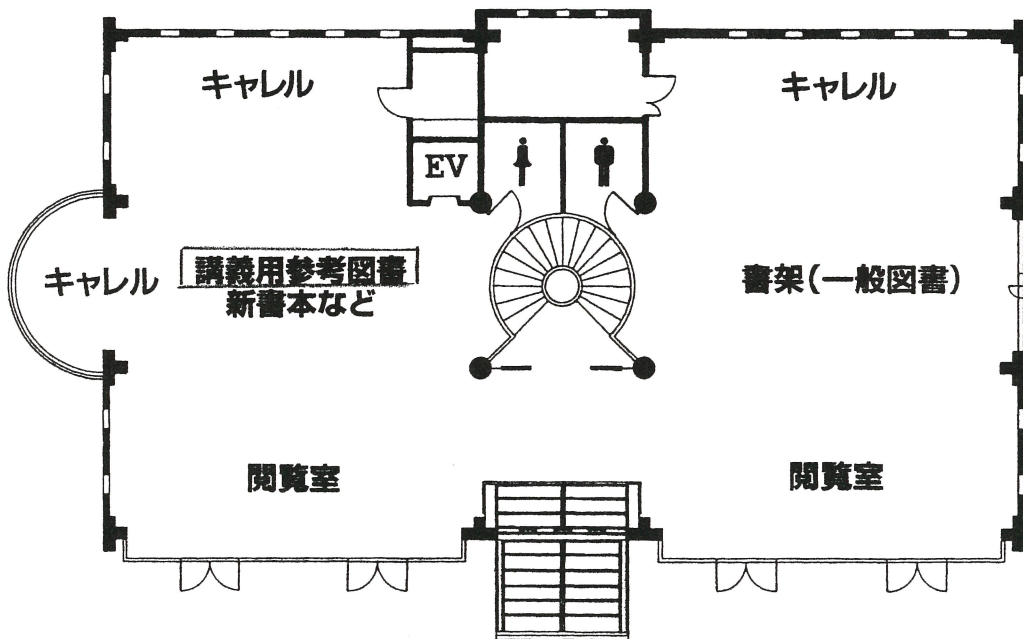
「本は寝て読むもの」。今、またこの悪しき習慣を取り戻したいと思い始めている。

（人間科学教育センター・社会科学）

講義用参考図書について

教養図書館では、1年次生の学修要項（シラバス）に掲載されている各科目で先生が指定している参考図書を講義用参考図書として、通常の書架とは別の書架に配架しています。配架場所は図書館2階東側（中央のらせん階段を上がって右手側）の閲覧席の間にある低書架です。目印のために背の請求記号ラベルのすぐ上に小さな赤い丸シールを貼っています。通常書架の本と同様に貸出でき

ますが、利用が集中するものについては貸出できません。貸出できない本には「禁帯出」のシールが貼ってあります。ただし、このように利用が集中する本については講義用参考図書とは別に、同じ本が通常の書架に配架されていることがあり、借りることができます。自分が見たい本が講義用参考図書の書架にない場合は、通常の書架も探してみてください。



開館スケジュール

開館時間	
4月15日～7月末（前期試験終了まで）	平日 9：00～19：00
	土曜 9：00～13：00
前期試験終了後～後期授業開始まで（9月初め）	平日 9：00～17：00
	土曜 閉館
9月初め～年末まで	平日 9：00～19：00
	土曜 9：00～13：00
休館日：日曜日、祝日、第2・4土曜日、本学記念日	

そのほか、臨時閉館や開館時間の変更があるときはその都度掲示でお知らせしますので、ご注意ください。

GPSで地球観測

吉 村 玲 子

表紙の写真左の、スターウォーズにでも出てきそうな白い円盤。一体何でしょう？車や、最近では携帯電話にもついているものです。答えはGPS受信アンテナ。写真では判りづらいですが、直径15cmほどの大きさです。

GPSとは米国国防総省によって開発された全地球測位システム（Global Positioning System）のこと。米軍が打ち上げた約30基の人工衛星から発信される電波を受け、地球を回転楕円体に見立てて位置を算出することができます。もともとは米軍の軍事利用のために開発されたものですが、2000年以降は高精度での民生利用が可能となりました。

このシステムを使って、地球周辺の宇宙の様子がわかります。地球の大気は上空に行くほど薄くなり、高度60kmを過ぎたあたりから、太陽の紫外線によって大気の構成原子から電子が飛び出し、プラズマ状態になっていきます。この高度60km～数1000kmにわたるプラズマの層を「電離層」と呼びます。衛星からの電波が電離層を通過するとき、電波の速度がわずかに遅れ、この遅延量から電離層の1 mあたりの全電子数（Total Electron Content：TEC）が計算できます。このTECは、太陽の活動や上空の風の影響、地球磁場のわずかな変動の影響を如実に受け、実に複雑な顔をわれわれに見せてくれます。

写真の下のは2003年における東京都上空のTEC変動を表したものです。縦軸に時間（0時～24時）、横軸に日にち（1月1日～12月31日まで365日）をとり、赤いところはTECの数が多く、青いところはTECの数が少ない状態となっています。縦軸に沿った変化を見てみましょう。TECは太陽の紫外線が当たることによって増え、夜には再結合してなくなってしまうので、昼に多く、夜に少ないという様子は理にかなっています。次に横軸に沿った変化を見てみると、春と秋に多く、夏に少ないという傾向が見られます。夏の方が紫外線が強いのにTECは少ないという不思議な現象が起こっています。それに加えて、約27日周期で変動している様子が見られます。こ

れは太陽の自転周期（約27日）に対応した変化です。さらに細かく見ると、1日～2日周期で変動する成分や、突発的にTECが増加する現象があることもわかります。

このGPS受信機をはじめ、電離層観測システムを東南アジアの磁気赤道付近に設置し、総合的に電離層変動をモニターするプロジェクトが、独立行政法人情報通信研究機構（NICT）のグループを中心に行われています。わざわざ赤道付近に設置する理由は、地球磁場が地平線と水平になる地域だからです。電子やイオンは磁場の力を受けて運動が変化するので、赤道（磁気赤道）とその南北に観測網を敷いて観測することで、地球大気のダイナミックな変動を知ることができるのです。北里に赴任する前にNICTに所属していた私も、在籍中はベトナムとタイにたびたび出張し、測定器の設置を行ってきました。写真のGPS受信機は、タイ王国プーケット島に設置したものです。プーケットというとビーチで有名なリゾート地ですが、私達は空港近くの山の上の専門学校の一角を借りて、校舎の裏の崖を上ったり屋根に上がったりしながら測定器を設置してまいりました。毎日Tシャツに作業パンツ、首にタオルという出で立ちで山を登っていく私たちの姿を見て、誰も頭脳労働者だとは思わなかったことでしょう。写真のGPS受信機は、学校の屋上に取り付けさせてもらいました。そのときに屋上から見えた景色が写真右です。

データが取れ始めたところで北里に就任が決まり、その後の解析には積極的に関わっておりませんが、地球・宇宙環境の研究を通してもっとも強く感じたことは、月並みですが「地球はすばらしい」ということ。紙面の都合上そのすばらしさをお伝えできないのが残念ですが、この環境を享受するのに国境や人の好き嫌いなど関係ないので、つらくなったら空を見上げて、このすばらしい惑星に生を受けたことに感謝しましょう。・・・変な宗教ではありません。

（自然科学教育センター・物理学）

本号から本紙のサイズをB5版からA4版に変更しました。少し大きくなった「閲覧ニュース」をどうぞよろしくお願いします。

閲覧ニュース102号 2008.4 発行 北里大学教養図書館
〒228-8555 相模原市北里 1-15-1
発行責任者 石 多 正 男 電話 (042) 778-8005